

【最優秀賞】松山地方法務局長賞

「世界は自分だけじゃない」

東温市立重信中学校 1年 中元 寿々羽

あなたは「障がい」と聞いて、何を思うだろうか。自分には関係ないと思い、知らぬ間に距離を置いている人がいるかもしれない。しかし、もし自分に障がいがあったとしたらどうだろう。私には、とてつもない不安を抱える未来が見える。それを「障がいがあるから仕方ない」で終わらせてしまう世の中を変えたくて、私は手話を習い始めた。

私は、はじめ、姉の付き添いという形で手話の講座に参加した。当時小学二年生で、手話を全然知らない自分が参加してもよいのだろうかと不安な気持ちだった。しかし、手話を習っていくにつれ、新しい言葉を覚えるように「もっと知りたい」と思うようになり、たくさんの手話の講座に足を運ぶようになった。その中で手話を聴覚障がい者だけが使う「特別なもの」ではなく、だれでも使える「みんなのもの」と考えるようになっていった。

六年生の時に、「被災地体験」に参加した。実際の災害を想定して避難所を設営し、テントを組み立てたり非常食の準備を行ったりする活動だ。活動しているうちに、胸が苦しくなっていた。それは、聴覚障がいの人だけでなく、障がいのある様々な人にとって、この社会がとても生きにくいものであることを実感したからだ。設営された避難所には、障がいのある人が安心していられるような場所は用意されていなかった。また、案内するための標示などもなかった。

私の隣にいた聴覚障がいの人は私に向かって、手話で「うるさい」と言った。聴覚障がい者の大半がつけている補聴器は、区別なく音を拾う。そのため、音が響く素材で床が作られている場合、そこを歩く全ての人の足音が聞こえてく

るのだそうだ。今回の避難所は、そんな素材で床が作られていた。その人は、その音のうるささにとっても困っていた。手話で話してもらえたから知ることができた。

こんな話をしてくれた人がいる。「町で白杖を持った人が歩いていれば、みんながその人に注目し、道をあけるだろう。でも、聴覚障がい者が歩いていてもだれも何もしない。その人が困っていてもだれも気がつかない。周りから見ただけでは、聴覚障がいは気づかれないからだ。」

見て分からない障がいは気づかれにくい。特に非常時には、自分のことで精一杯で周りが見えなくなり、困っている人にさらに気づきにくくなる。私たちは、避難所に聴覚障がい者がいることに気づけるだろうか。その人たちが、私たちには気にならない音の大きさに苦しんでいることに気づけるだろうか。他の障がい者はどうだろう。何に困っているか理解し、ちゃんと応えることができるだろうか。私たちは、自分以外のだれかのことを考えて行動する必要があることを、強く意識しなければならないのだと実感した。

学校でも、障がい者への理解を進める学習が行われている。私が小学四年生のときに、学校で全盲の人、聴覚障がいのある人の不自由さを体験する学習があった。私たちが当たり前に行っていることが大変であることを知った。そして、どんな場面で助けが必要なのか、どのようにしたら助けとなれるのかを学んだ。

私が手話を学ぶこと、避難所体験を実際にしてみることに、学校で障がい者のことを学ぶこと、どれも困っている人を理解し、手助けを行うために必要なことだと思う。私はもっと多くの人たちへの理解を深めたい。

私は将来、学校の先生になりたい。そう強く思うようになったのは、ある先生に出会ったからだ。あるとき、体調が悪くて保健室で休んでいた。隣に男の子が座っていた。その子に先生が話しかけていた。口を大きく開けて、口元が

よく見えるようにしていたのが見えた。また、首からかけていた機械を口元に近づけて話していた。きっとそれは補聴器に音が聞こえやすくするための機械だったのだろう。私はこの先生の配慮と、伝えようとする気持ちに心を打たれた。手を差し伸べるのが一人ではなく多くの人であったなら、助けは大きな力になるだろうと思った。私はその一つになりたい。

「障がい」は、見えない、知らないだけで、みんな持っているものだと考えている。私たちが抱えている悩みやコンプレックスも、障がいと同じではないだろうか。周りの人に分かってもらえにくいけれど、辛い。そしてその辛さを分かってもらえない辛さは、多分、だれもが抱えている。

世界は自分一人で作るものではない。「自分の行動で誰かを傷つけているかもしれないし、誰かを助けているかもしれない」ということを頭に置いて、一人一人が他の人を思いやる心を持ちたい。そうして、今よりもっとみんなが生きやすい世の中にしていきたいと思う。